

## ●最優秀賞

# 「1000年後の命を育む 生徒の育成」

～ふるさと創造への参画を通して～

宮城県気仙沼市立唐桑中学校 あべかずひこ  
**阿部一彦**



### 〈概要〉

東日本大震災で最大の被災地となった宮城県女川町。80%以上の家屋が流失し、多くの家族が行方不明のまま中学校に入学してきた64名の生徒。避難所から通学し、簡易給食が続く極限の学校生活の中で、自分たちが経験した辛く、悲しい出来事を二度と繰り返したくないとの一念で、社会科の授業から津波の被害を最小限にする対策案を生み出した。子どもたちの対策案は、被災地の代表として世界防災閣僚会議などで世界へ発信され、震災で多くの尊いものを失ったふるさとの人々を勇気付け、よりよいふるさとを創造していく。

「1000年後の命を守るため」を合言葉に生徒は、100円募金で1000万円以上を集め、町内の全浜に津波からの避難を呼びかける「命の石碑」が建つことになった。卒業後も、自然災害から命を守る「命の教科書」作りを続けている。全てが子どもの中から生まれた取組を、子どもたちから多くの貴重なことを教えていただいた者としてここに記録する。

### I 主題設定の理由

2011年3月11日の東日本大震災により、宮城県女川町では全人口の約8.7%の尊い命が奪われ、家屋の80%以上が流出した（市町村別では最大の割合）。翌日の卒業式のため午後2時15

分に帰宅した3年生2名が家族と共に、これから始まる輝かしい未来を奪われ、一教師として、命を守る術を教え切れなかったことを悔やんでも悔やみきれない。そんな私に希望の力を与えたのが、「山の上にある学校から子どもの声が降ってくる。これが俺ら大人の生きる源なんだよね。先生、子どもたちをお願いします!!」という女川町での10年来の友人にいただいた言葉である。私はこの世に生まれて、こんなにも力のある言葉を聞いたのは初めてだった。あのときから私は、残された人生を一人一人の子どもたちの明るい未来のために使いきることを願い、多くの方々のご理解とご協力を賜りながら、かけがえのない“今”を大切にしていくことを誓った。

しかし、4月8日から始まる平成23年度の教育活動は、それまでの“学校の常識”が全く通用しない過酷な状況が予想された。そこで、「子どもと教師さえいれば、学校はできる」を合言葉に、生徒一人一人がここに自分の命があることを実感し、互いのよさを認め合い、協力しながら、自分たちで課題を解決できるような教育活動を積み重ねていくことを目指した。特に、入学したばかりの1年生の社会科で、甚大な被害を受けたふるさとに、社会科として何ができるのかを問いながら授業を積み重ねることにより、一人一人の生徒がふるさとの未来を見つめ、よりよいふるさとの創造に参画することを通じて、1000年後の命を育む生徒を育成していき

いと考え、本主題を設定した。

## II 研究目標

ふるさとの地理的特徴を調べる社会科の授業を中心とした総合単元的な学習による、よりよいふるさと作りへの参画を通して、1000年後の命を育む生徒を育成する。

## III 研究の概要

### 1 女川町の被災状況（資料1）

女川町の東日本大震災による死亡率は、55.9% [死亡率=(死者数+不明者数)/(死者数+不明者数+避難者数)×100] と最も高く、担当していた学年の尊い命が奪われてしまった。これまで女川や旧鳴瀬町の中学校等で携わった教え子、親戚や近所の若者などの数多くの命を守る術を伝えきれなかったことを悔やんでも悔やみきれない。

学校に残された約130名の生徒と水も食料もない中で4日間。離島から避難してきた方との共同生活、校長室への女川町災害対策本部の設置等。ありとあらゆる対応が求められる中で、校長の優れた危機管理能力に基づく的確な指示、教職員はじめ地域の全ての方々への献身的な物心両面でのご支援とご協力により、私たちは何とか生き延びることができた。このような状況の中で、被災した学校の中では最も早い3月20日の卒業式、24日に終了式を実施した。ただの一教員である私にできることは、家に帰ることができないでいる子どものそばにそっと寄り添うこと、そして、下足のままたくさんの人が入ってくる玄関を、時間を見つけては池の水を使って雑巾で水拭きすることぐらいだった。

5日目の昼に学校から帰宅した生徒が、翌朝、瓦礫の山を乗り越え、道なき道を学校にやってきた。地震で散乱している教室の掃除や本棚の整理を黙々とやり、休憩時間に友達とひそひそ話が始まる。生徒が学校から出た後に聞きした悲惨な光景を涙も流さず、淡々と話す。私はただ寄り添い、じっと話を聞き、子どもの心を

受け止められるよう全精力を注いだ。到底無意味なことだったが、私にはそれぐらいしかできなかった。

そして、3月29日に離任式が行われた。車が流され、道路がなく、ガソリンもない中、ほとんどの生徒が登校した。震災以来、初めて会った3年生も十数人もいた。式の最後に、校歌を全員で歌い、離任される先生方は感極まって涙が流れていた。しかし、子どもたちは泣くこともなく、校歌を歌いきった。私は初めて、卒業式と修了式、そして離任式も同じ光景があり、生徒はもう感情を表現できないくらいの極限の状況の中で生活していることを痛感した。その日の夕方、暗くなった職員室で、ある先生が段ボールを持って何かを始めた。その先生が私の近くに来たので、「先生、何をしていますか」と尋ねた。「4月8日に始業式が始まるが、子どもたちは何も準備ができない。そこで、教員の机の中にある鉛筆やノートを集めたい」との言葉に、はっとさせられた。あわてて探したが数本の鉛筆しかなく、段ボールは底が見える状態だった。「何とかしなければ、…」その日は家に帰ることができる日だったので、家中を探したが、あるのは色鉛筆1ケースだけだった。

翌朝、学校の駐車場で鉛筆のことを考えながら、ふと時間を見るために普段はめったに使わなかった携帯電話を見た。ようやくつながるようになった携帯電話にたくさんの着信履歴が



資料1 2011年4月7日 読売新聞

入っていることに初めて気が付いた。その中にある報道関係者の名前が何十回もあった。宮城県から転勤して2年になる方が心配していただいていることが履歴から伝わってきた。御礼の電話をしたが涙声ではっきりと聞き取れなかった。そこで、女川の現状を伝えると彼女がいる三重県のNPO法人愛伝舎をご紹介していただいた。女川町の遠藤定治教育長から「このままでは座して死すことになる。ご支援をお願いしたい」とのご指示をいただき、鉛筆、ノート等を送っていただくことになった。この日から「希望のえんぴつプロジェクト」として、今回の大震災に際して、最も早く始まった被災地と民間をつなぐ支援の輪が始まった。

その後、4月8日の始業式に向けて、女川町内の5つの小・中学校が当時必要なものや、子どもたちの実態に応じて送っていただいた。(希望の鉛筆プロジェクトの支援は、2014年9月まで続いた。)

## 2 生徒の実態

大震災前は、80名の新入生で3学級の予定だったが、大津波により自宅や家族を失った生徒を中心に転出が相次いで66名となり、2学級になることが決定したのは入学式の直前だった。ほとんどの生徒が避難所から通学し、制服や運動着、教科書は子どもたちに届く前に流され、夏休みまでは私服での生活が続いた。そのような過酷な状況の中でも、子どもたちは毎日学校にやってきた。この当時の状況を生徒は、「笑えているかな 自分の顔」と詠んだ。二つの小学校から入学してきた子ども同士が、自分自身の境遇を押し殺し、互いに支え合いながら懸命に中学校生活を歩み出そうとする姿勢が感じられる集団になっていった。多くのご支援により自分たちの生活が成り立ったことを実感した子どもたちは、自分たちに今何ができるのかを考え、自分たちの力を合わせ、実現していきたいとする雰囲気が次第に大きくなっていった。

## IV 研究の経過

### 1 初めての社会科の授業 (全ての始まり) (資料2)

入学して初めての社会科の授業で、小中学校の社会科の学習の関連性を知り、中学校社会科への興味・関心を高めるための授業として「ふるさと女川に、社会科として何ができるか」を考える授業を行った。

津波の記憶がフラッシュバックしないように配慮して授業を進めると、「女川の漁業、観光業を復活させたい」「女川町の津波の大きさを調べる」などの考えが多く出された。更に、「小学校では女川では津波の被害がないと教えられた」と話すR君がいた。小学校で使う社会科の副読本を編集していた私は、「副読本のあの部分を担当したのは私です。そのように考えていたなら、本当にごめんなさい……。これからの社会科の授業で本当のことを学んでみませんか」と言うと、R君は大きくうなずいてくれた。(高校生になったR君の夢は、社会科の教師になることである。)大切な家族を失い、自宅を流され避難所での生活。簡易給食のため早く下校した後は、家で使うための水汲みに並ぶ日々が続いている中で、自分たちのふるさとを見つめ、自らふるさとの再生に主体的に関わっていこうとする意欲が大いに感じられた。この意欲を取

1年社会科 指導略案 (4月20日実施)

	主な学習活動	指導上の留意点	評価・備考
導入	<ul style="list-style-type: none"> <li>●教師の主な発問・予想される生徒の反応</li> </ul> <p>1 社会科学習のねらいを知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●社会科では、どんなことを学びましたか。</li> <li>●歴史の学習について、第二次世界大戦・トヨタ自動車・米づくり など</li> <li>●学んだことは、どう役立つのですか。</li> <li>●書あったことを今に生かす。</li> <li>●どんなくらしをしているかを知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○6年時に学んだ歴史や政治・経済のしくみを中心に、知っていることを自由に出させたい。</li> <li>○よりよい社会を管が創っていくために、様々なことを学んできたことに気付かせたい。</li> </ul>	
展開	<p>2 ふるさと女川に今、社会科として何ができるかを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●自分たちのふるさと女川のため、社会科として何ができるのか。</li> <li>(1) 自分の考えをノートに書きなさい。</li> <li>●津波の歴史を調べる。●漁業の被害を調べる。</li> <li>●ボランティアをしている人へインタビューする。</li> <li>●みんなが働く場所が必要だ。</li> <li>(2) 班でアイデアを紹介し合いなさい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○辛く、悲しいことを思い出すのでなく、これからのふるさとをどのようにしたいのかを考えられるように支援したい。</li> <li>○考えたことを互いに紹介し合うことで、社会科として何ができるのかを考えさせたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎自分たちのふるさとをよりよいものにしていこうか。</li> <li>(思考・判断)</li> </ul>

資料2

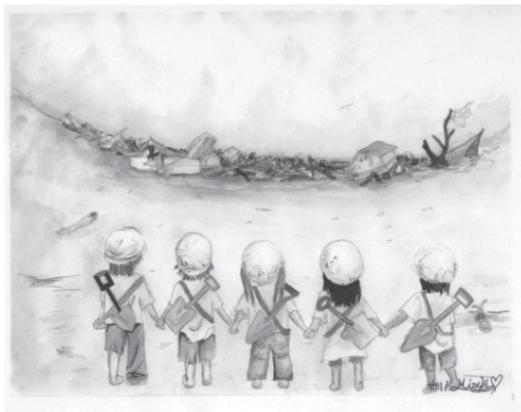
り入れた授業づくりを目指したいと強く考えるようになった。

## 2 俳句の授業（心の奥底からの願い）

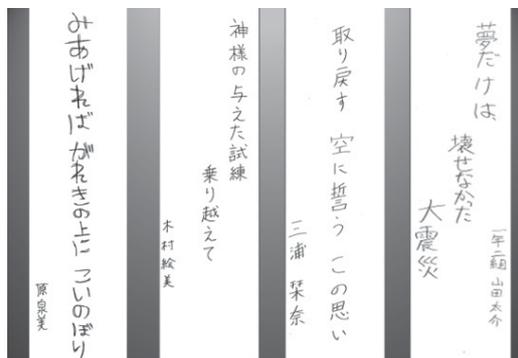
（資料3）（資料4）

「希望のえんぴつプロジェクト」が各種メディアで取り上げられた結果、子どもたちへの学用品が4月初めから連日届けられた。それらをただ渡すのではなく、支援していただく方の温かい心を素直に受け取り、いつの日か自分の目の前で困っている人にそっと手を出せる人になることを合言葉にした。子どもたちの取組が多くの方々に認められ、自分たちの活動を紹介する場面でこの合言葉を子どもたちは今も伝え続けている。

また「希望のえんぴつプロジェクト」と日本



資料3 スペースシャトルで宇宙に行った絵



資料4 生徒が6月に作った俳句

の宇宙実験船「きぼう」が同じ名称であるとの縁で、宇宙航空研究開発機構（JAXA）と一緒に被災地女川の子どもの作品をスペースシャトルで宇宙に揚げるようになった。卒業生が描いた絵と共に、春を季語に生徒全員で俳句を作るようになった。国語科の先生と共に私も一緒に7つの学級での俳句作りの授業を行ったが、一人一人の生徒が作った俳句に込められた願いや思いを考えると、涙なしで読むことができなかった。しかし、震災のことは極力学校では避けようとしていた当時の私にとって、子どもたちはしっかりと震災に向き合い、未来に向けて歩もうとしていることに気付かされた大変貴重な授業となった。

支援物資からいただいた温かい心に感謝しようとする生徒の想いと、俳句に込めた震災を乗り越えようとしている子どもたちのたくましさは11月24日に実施する「津波の被害を最小限にする対策案」の授業づくりの源となった。

## 3 社会科の公開授業（一人一人の心に種を撒く）（資料5）（資料6）

1年社会科の「身近な地域の調査」の単元で、女川の地形図からふるさとの地理的な特徴を読み取る学習を実施する中で、再び襲うであろう東日本大震災規模の巨大津波から、人々の大切な命を守る対策案を考えた。グループごとに話し合いを積み重ね、「高台に避難すればいい」という案で学級の意見がまとまりかけたとき、「『逃げろ!!』と言っても避難しない人がいる。その人はどうするの」と一人の女の子が涙ながらに発言した。その子の大好きな祖父は、避難しようとしなかった人を3回目に説得しに行ったときに、津波に襲われ帰らぬ人となった。その一言がきっかけとなり、64名は、もう一度最初から対策案を考え直し、次の3つの案を生み出した。

津波対策の第一は、「絆を深める」である。避難しようとしなかった人を説得できる人の存在を近所の人を知っているような絆があれば、誰一人も自分たちのような辛く、悲しい思いをしな

# 記録に残す

☆まわはみんなが津波の事を知ろう☆

理由→3.11のとき、間違えた避難の仕方や、間違えた津波の知識などで亡くなった人が多かった!!!

そんな誤りを残すには...

- ① 避難訓練の強化
- ② 正しい知識を身につける
- ③ 催しを開く
- ④ **記録に残す**

◎今回、私自身題材にあげるのは、**記録に残す**です。

石碑がダメなら?

→このとき、石碑で使ったことを記録として残すために石碑を作っていたんです。その石碑には、津波への心構えが刻まれていました。しかし、津波への心構えがのっていてもそれがわからず、今回の3.11で多くの死者が出ているんです。

④石碑がダメなら、もっと多くの人に津波の知識を広く知ってもらい、100年後も1000年後も残すためには**記録に残す**じゃないか!!! と思いました。

案① 石碑を作らせない

1. 高台への避難場所への石碑を作る
2. 復讐にも見えないようにシーラー式
3. 石碑には3.11の事がついで

→所々に、合同避難訓練 練成して石碑を基に3.11について説明するという大規模な案

案② 一冊の本にまとめる

それぞれの記録を全て一冊の本にまとめる。例えば、津波犠牲者の人数、被災した土地の数や、写真、被災者一人一人の強い思い。お厚い一冊の本にするといいです。震災を体験した人達だけじゃなく伝えておきたい事が石碑や本にその記録に残すことにより、子孫の世代までずっと伝えていく事ができるといいです。



資料5 「私の考えた津波対策案」

くてもいい。また、震災で自分たちの命を守ってくれたのは、避難した人の絆である。その絆を普段から深めていくことが、津波対策の土台になるというのである。

次の対策は、「高台への避難路と住宅や学校、病院、高齢者施設の高台への移転」。そうすれば、素早く避難することが困難な人たちも安心して生活できる。また、漁業で生活する人や初めて観光で訪れた人も津波が到達しない高台に避難できるように、太陽光パネルを備えた石碑を作るということであった。

最も実現させたいのは、「記録に残す」である。自分たちの辛く、悲しい体験を石碑や書籍にして、未来に残そうという案である。この3つの対策案のねらい等をゲストティーチャーとして政府の東日本大震災復興委員である高成田亨氏をお招きし、様々な面からご指摘をいただいた。

## 対策まとめ議論

玄川一中 公開授業で1年2組

### 津波の犠牲者 再び出さない

津波犠牲者を出さない対策方法について議論する生徒  
—玄川一中—  
石 嶋 か づ へ 平成23年(2011年)12月2日(金曜日)



資料6

子どもたちは、自分たちの対策案に自信をもち、1000年後の命を守るため、3つの対策案を実現しようとする種が一人一人の心の中に撒かれていった。

4 ユネスコ国際会議(世界へ発信) (資料7)

64名の活動を知ったユネスコ・アジア文化センターから2012年1月、アジア各国からの支援メッセージを届けていただいた。英語で書かれた文章や絵を見た64名が感謝の手紙を書いたのがきっかけとなり、アジア太平洋ユネスコスクールの国際会議で、津波対策案を発表する機会を得た。1年間の社会科の授業のまとめのレポートで、大切な家族を失った生徒が、「この悲しい体験を二度と繰り返したくない」という一心で、自分たちが考えた津波対策案を訴えた。生徒の心からの叫びと、津波対策案を国際会議で提案することにより、64名の対策案はアジア各国の代表によって、それぞれの国の子どもたちに伝えられることになった。



資料7 2012年5月13日 毎日新聞

5 世界防災閣僚会議(一人一人の芽吹き) (資料8)

世界防災閣僚会議(2012年7月3日)の基調講演で、世界約100カ国の閣僚等に、3つの津波対策案を発表することになり、社会科の授業で対策案について再度考えた。授業では「記録に残す」をどう実現するかについて様々なアイデアが出された。「書籍だけでは不十分なので、

記録映画を作る」「町内の21の浜に石碑を建てるには、いくらの予算が必要なのか」等について活発に議論された。

そのとき、T男の提案に皆が賛同した。「ただの本ではだめだ!! 私たちが今、方程式を解けるのは、小学1年で足し算を習い、2年生で掛け算を覚える等の勉強をしたからだ。それと同じように、自分の命を守る手立てを小学1年生に分かるようなものから、順番に学んでいける教科書を作ろう!! 津波だけでなく、台風や水害、交通事故等から大切な命を守る教科書を作ろう!!」。その発言がまた子どもたちの心の種を増やし、それらを託された二人の生徒が国際会議で発表することになった。

自らの余りにも辛く、悲しい体験を発表することになる生徒とその保護者に、国際会議での発表について相談に伺った。すると母親は「大切な家族を失ったことを話すことは、本人はもとより、私たち家族にとっても辛いことです。しかし、今、このことを伝えないとまた同じ悲惨なことが繰り返されてしまいます。だから、進んで世界中の人たちのために伝えさせてほしいのです」と話された。発表後、日本の外務大臣や復興担当大臣等から「ぜひ、3つの対策案を実現させてください」との温かいお励ましをいただいた。更に、駐日EU大使からは、「女



資料8 2012年7月4日 読売新聞

川第一中学校の津波対策案をEU27カ国に必ず伝えます」とお話しいただいた。生徒たちの発表は宮城県内の全てのテレビ局と新聞社が取材し、世界中に発信された。

## 6 明日の防災を考える会IN女川（1000年後のふるさとづくりへの参画）（資料9）

世界防災閣僚会議で世界へ発信した津波対策案を女川町長や町議会議員に提案（2012年11月27日）するため、社会科の授業で具体案を話し合った。対策案1「絆を深める」では、仮設住宅では「隣に誰が住んでいるかわからない」「朝夕の挨拶が少なくなった」などの意見が出され、「今のままでは命を守れない」と涙ながら訴える生徒がいた。そこで、実態を調べるアンケートを作成し、仮設住宅の住民約1000人にアンケートを実施すると、生徒の予想どおりの実態が明らかになった。そこで解決策として、「小学生以下の子どもたちが、触れ合う場」を中学生が作っていくことになった。生徒のねらいは、小さい子どもたちが集まるときには、親や大人と一緒にやってくるので、大人の交流も深まるはずであるという発想だった。

対策案2「高台へ避難できる町づくり」では、津波が到達しない高台への避難路にソーラーライトを設置する案が出され、模型を作成した。また、仮設住宅に電動自転車を設置することで、

非常時の避難に活用するだけでなく、仮設住宅で引き離されて生活することを余儀なくされている高齢者が日常的に使用できるようにし、以前のような「お茶っこ飲み」（井戸端会議）を再現させたいとの願いが込められている。

対策案3「記録に残す」では、津波被害で倒された3つの鉄筋コンクリートビル（人類史上2例目）の活用方法について、世界防災閣僚会議の前に「倒れたビルは原爆ドームと同じなのでは？」と考えた生徒が中心となり、何度も話し合いが繰り返された。住民アンケートからは、約70%が解体を望んでいたが、その理由が「復興の邪魔」「予算が必要」であり、心理的な面からの反対意見が少ないとの実態が明らかになった。そこで、取り寄せていた広島原爆ドーム関連の資料を生徒に配布し、再度議論した結果、「津波の恐ろしさを未来に伝えるための記念館として保存する」案で全員の意見が一致した。

また、生徒たちは休日を利用して町内のフィールド調査を続け、縄文遺跡には津波が到達していないことを、「歴史を学ぶ→過去を知る→未来を創造する」という考えを抱くようになった。更に鎌倉時代の板碑や江戸時代以降の津波関連の石碑調査から、自分たちが未来に伝えるべき石碑の大きさ、形状を考え、町内21浜の津波が到達しなかった地点への石碑建立を考えた。生徒の考えを（株）山田石材計画の山田社長に伝えると、「石材は寄付をします」と話され、輸送費等で1000万円かかることが分かった。生徒たちにはどうすることもできない金額だったが、女川を観光の街にしようと、1000万円の高村光太郎の歌碑を100円募金で作った、生徒たちの知っている方のことを伝えた。生徒たちは、津波でお亡くなりになったその方の思いを受け継ぎ、「女川の1000年後の命を守るため100円募金をする」と決めた。そして、「東京にはいつでも行けるが、全員で募金ができるのは修学旅行のときしかない」と満場一致で生徒たちの考えがまとまった。



資料9 2012年12月19日 朝日新聞

この頃から、子どもたちは「1000年後の命のために今できることを!!」を合言葉に、全精力を3つの対策案の実現に向けて一步一步動き出していった。「自分たちが体験した辛く、悲しい体験を二度と繰り返してほしくない」との思いが、町長や町議会委員の鋭い質問にも動じず、「ふるさとを私たちが作っていきます」との言葉につながった。

## 7 ユネスコアジアESD次世代リーダーワークショップ（動き出す）（資料10）

子どもたちの代表者4名が、アジア各国の中学生と防災について1週間交流する機会があった。(2013年2月3日)生徒たちは、モンゴルでは春の雪解けによる大洪水、フィリピンでは巨大台風、タイでは洪水で多くの幼い命が失われているのを知り、自分たちが作ろうとしている命の教科書をアジア各国にも届けていこうと考えるようになった。

こうした子どもたちの1000年後のよりよいふるさとづくりを目指そうとする取組を実現させるため、保護者や女川町自治会長、文化財保護員などの方にお願ひし、「1000年後の命を守る子どもたちを支える会」を2013年1月に発足していただき、子どもたちが呼びかけた募金の管理・運営をお願いすることにした。子どもたちは早速、町内の観光施設などに募金箱の設置

をお願いしたり(1月~2月)、3月21日の女川復興祭で訪れた方々に募金を呼びかけたりした。復興祭では、「中学生が1000年後の命を守る活動をしているので、私たちは高台へ避難することを忘れないため、女川復興男を決めるイベントを1000年続けます」と女川町観光協会の青年部会が動き出すなど、子どもたちの活動は、地域を巻き込みながら、次第に大きなうねりとなっていった。

また、3月31日、女川町を訪れた下村文部科学大臣に直接、津波対策案を紹介させていただいた。4月の修学旅行での募金活動についてもお伝えすると、「文部科学省でもどうぞ」とお話ししていただき、文部科学省や宮城県教育委員会などにも募金箱を設置することができるようになった。女川町や修学旅行での募金活動をはじめ、福岡県、兵庫県等、子どもたちが直接多くの方々に募金を呼びかける機会を与えていただき、半年後の8月末には目標額である1000万円を超える貴重なお金を預かることができた。

## 8 石碑の披露式(2013年11月24日)(資料11)

2012年度末の人事異動で私は気仙沼市の学校へ転勤となったが、「石碑の設置場所を調査しよう」「教科書作りはいつやるの?」と子どもたち等から要望を受け、夏休み以降、参加できる生徒と共に活動を続けることになった。石碑の設置場所を教えていただくために、ある浜の区長さんと現場を調査しているときだった。その区長さんが「ここにはぜひ中国語の説明を加えてもらいたい」と中学生に訴えられた。その場所は中国人実習生の命を助けた後、最後の確認に行ったときに自らの命を奪われた水産会社の専務さんが中国人を避難させた場所だった。区長さんは子どもたちに「今後、日中関係は必ず良好になるはずだ。そのとき、両国の新しい関係の出発点にこの場所、そして女川の命の石碑がなってくれると信じている。中学生の活動に感謝したい」と語ってくれた。その区長さんの意向を取り入れ、国際連合の公用語である英

**千年後の命守ろう 宮城・女川の中学生、石碑建設へ募金**

募金箱の設置を頼みに町を歩く生徒たち=2日、女川町の仮設商店街

【小野智美】東日本大震災で大きな被害を受けた女川町の中学生たちが、町内の津波到達点に石碑を建てるための100円募金を始めた。「千年後の命を守る」を合言葉に動き始めた中学生たちの熱意に、保護者たちも立ち上がった。

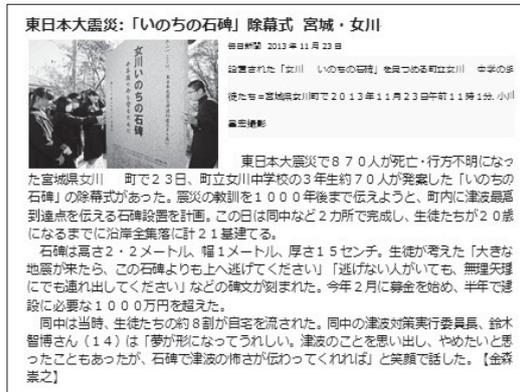
募金を始めたのは、町立女川第一中学校の2年生たち。1年生の社会科の授業で「ふるさとのために自分たちは何ができるか」を考え、(1)絆を深める(2)高台へ避難できる町づくり(3)記録に残す—という津波対策を練り上げた。

記録の具体策の一つが石碑だ。町内には1933年の昭和三陸津波の後に建てられた石碑があったが、それは現代の町の人々の記憶にほとんど残っていない。新たな石碑は、町内21の浜すべての津波到達点に建てる計画だ。「毎年9月11日にそこで避難訓練をおこなって、震災を語り継ごう」と考えている。

石材店の社長に聞くと、21基の建設には約1千万円がかかるという。そこで100円募金で息長く資金を集めることにした。

彼らの熱意を受け、保護者たちも動いた。「[いのちの石碑]を作る女川の子どもたちを支える会」を設立し、募金先の銀行口座を開いた。会長山下由希子さん(44)は生徒たちからこう伝えた。「1円でも10円でも、お金にのせてくる思いを受け取ってほしい。これから生きていくすべての人たちのために、と願うお金です」

資料10 2013年3月14日 朝日新聞



資料11 2013年11月23日 毎日新聞

語、フランス語と共に、中国語のメッセージを刻むことになった。

## 9 参画から自律的な学びへ

中学校を卒業した子どもたちは、3月末には、卒業生の3分の1ほどが集まり、「命の教科書作り」を始めた。そのとき、2013年10月に石材会社で見た光景を一人の子どもが語った。「大きな地震があったら直ぐに逃げてください。という部分が、大きな津波があったら…となっていた。自分たちの石碑を作っていた方がいい方にさえ、うまく伝えることができていない。1000年後の命を守るためには、石碑だけではだめだ。だから石碑の披露式は達成感があっても嬉しくはなかった…」と。集まった20数名が同じ思いをもっていた。そして、世界中からいただいたご支援の御礼として、2015年3月仙台で開催される国連防災会議に「命の教科書」を伝えていくことになった。

それぞれが高校に進学し、部活動や諸活動の合間を割き、月2回ほど集まって活動を継続するのは、至難の業である。しかし、「石碑は、女川の命を守る活動。教科書はその活動を全国、世界へ広めていくための一歩」との認識の下、愛するふるさとづくりへの参画が、子どもたち一人一人の自律的な学びを創造する源になりつつある。

## V 終わりに—成果と課題にかえて—

### 1 1000年後の命のために……

東日本大震災は現在の人類の英知をもってしても、残念ながら防ぐことはできなかった。しかし、子どもたちは、「1000年後の未来のために今、何ができるのか」を合言葉に、これまでの知識と経験を総動員して前を見つめ、一歩ずつ、確かに前へ歩みを進め、よりよい1000年後のふるさとづくりに貢献してきた。その子どもたちの歩みが、確実に一人一人の命を大切にす未来への大きなうねりの源になりつつある。

### 2 全ての答えは、子どもたちの中にある

社会科の一つの授業から始まった子どもたちの学びは、「命とは何か」という人間としての根源的な学びにつながり、よりよい社会づくりに貢献しようとする活動へと発展していった。そして、仲間や家族、地域住民、そして多くの方々に賛同していただいた経験が、子どもたちの自律的な学びになり、一人一人の今後の人生の中で大きな成果を与えてくれるものと確信している。

これらの活動の源となる答えは、全て子どもたちの中にあつたのである。それを引き出していくことの尊さや恐れ、生み出していくことに関われる喜びや希望を、私は子どもたちから教えてもらっている。

### 3 目の前の人のために

64名の考えた第一の津波対策案は、「絆」である。自分の目の前にいる人のことを考え、自分ができることを相手のためにそっとできる心を、一人一人の子どもに育てていきたい。それが、この大震災で子どもたちの目の前にいる大人や教員の使命であると考えている。